さらっと読めるSS集（1）

yamaguro810

リード

リード

　私が彼女と暮らし始めて数年経った。実家を離れてから一人暮らしが長い自分にとって久しぶりの家族である彼女は、実に私に良く接してくれていると思う。
　出会いは街のペットショップ。当時、一人暮らしを始めて数ヶ月経って生活にも慣れ始めた私は無性に一人で居るのが寂しくなることがしばしばあり、実家で犬を飼っていたことを思い出し、犬を飼ってみようと足を向けた。そこでスタッフとして働いていた女性は、店が暇だからだろうか、私がペットを飼おうとした理由を親身に聞いてくれ、私も彼女に対していつの間にか色々と話してしまっていた。悩んだ結果、実家で買っていた種と同じダックスフンドを連れて帰ることにした。
　実を言うと、現在私と彼女は結婚しているわけではない。いわゆる同棲というやつだ。自分を待つ者があるというだけで、私の日々はぐっと明るくなりペットショップに行ったことは私の人生を大きく変えたように思う。そして同棲してから五年目の今年、私は遂に彼女にプロポーズすることに決めた。料理は出来ないし、家事も得意ではないが、それでも私にとっては最良の者だと思っていた。後日、私のプロポーズを聞いた彼女は何も言うことはなく、じっと私の言葉を噛みしめてるように見えた。結局答えは得られなかったため、彼女とは現在も同姓と形で一緒にいるが、最近悩んでいることがある。先日こんな事があったからだ。
　その日は仕事も休みで天気も良く、散歩がてらに彼女とコンビニエンスストアに向かうことにした。私の横を歩く彼女はすごく楽しそうで、それを見て私も嬉しくなり、そういえば彼女と歩くのも久しぶりだなあと思ったものだ。
　コンビニエンスストアについた私たちは、並んで店内に入った。その時、入り口側のレジで作業していた店員が私を見るなり血相を変えて走り寄ってきてこう言った。
「申し訳ございません。当店では――」

金魚すくい

金魚すくい

夏休みが終わろうというある日、少年は悲しみに暮れていた。少し前に神社の祭りでとってきた金魚が遂に死んでしまったのだ。彼にとって、生き物を育てるのは初めてであり、飼育もしっかり行い、非常に可愛がっていただけに、水槽の中で浮いているのを見たときの彼の表情はとても辛そうだった。
　次の日の朝、少年が金魚がいなくなったはずの水槽を見てみると、昨日と同じように金魚が泳いでいた。少年は驚きよりも嬉しさが勝り、父にそれを報告しに行った。少年は父の袖を引っ張り水槽の前に来ると、目を見開いた。先程まで泳いでいた筈の金魚は、昨日と同じように浮いていた。少年はうろたえ、泣きながら、さっきまでは元気に泳いでたんだよと言い、父は泣いている少年を抱きかかえ、後で埋めてやろうと優しく語りかけると水槽の前を後にした。私はその光景を見て幸せな気持ちになった。なんと微笑ましい図なのだろうか。悲しむ息子を慰める父親、実に家族らしいじゃないか。私は金魚すくい用の網を持って水槽に歩み寄り、動かない金魚をすくい、手に持ったビニール袋に網ごと捨て、代わりに生きている金魚を水槽に入れた。水槽に放られた金魚は元気に泳ぎ回り始めた。自分の命が明日の朝までと言うことを知らずに。それが私が与えた役割だから。そう、少年はこれから毎日金魚が死んでは生き返る様子を見続けるのだ。水槽の横に置かれたノートには、金魚の観察と書いてある。そう言えば彼の自由研究は金魚の観察だったと私は思い出した。面白いじゃない、思わず笑みがこぼれる。彼が生死を繰り返す金魚を観察している間、私はそんな彼の様子を観察してやろうじゃないか。彼の自由研究と私の自由研究、どっちの方がデキがいいか、あいつに見せつけてやろうか。最高に面白いじゃないか。いや、それより――
私がそんな事を考えていると、食卓の方から怒鳴り声が聞こえた。
「佳子さん！息子に働かせているのだから、家事くらいしなさいよ！」
　義母の罵声はもう怖くない。お義母さん、実はあなたの観察はもう始まっているんですよ。あなたの家庭を壊す第一歩はもう始まっている。買い始めた頃、金魚は六匹いた。なのに今日、息子が初めて金魚が死んだのを見たのは何故でしょうか。お義母さん、早起きすれば誰にも気づかれないと思ったのですか。最後の一匹だけ残したのは良心のつもりですか。私はしっかり見ていましたよ。あなたが金魚を口に入れる瞬間を。しっかり画像も残っています。決行は夏休みの最終日、それまでに息子は毎日金魚が動いたり止まったりするのを見て混乱するはず、気持ち悪いと思うはず。それが全て義母のせいになるのだ。金魚を食して、追加して、殺して食して、また新しい金魚を入れる。嫌われるどころか、家に居場所がなくなるだろう。私の居場所を取り戻すために用意した金魚は後七匹。金魚は私を救ってくれるだろうか。

命を売られた愛玩動物

命を売られた愛玩動物

「なんだよこれ……」
　彼が目を覚ました場所は、部屋のベッドの上ではなく、彼が日々勉学に励んでいる教室だった。だが彼にとって、それは最も驚くべき事ではない。彼の目に浮かぶのは恐怖。本来なら悲しみや怒りが湧いてくるのだろうが、余りに凄惨な光景が彼の脳を恐怖で支配した。彼の眼前には昨日まで一緒に授業を受けたクラスメイト達が横たわっていたのだ。彼は逃げるように部屋の出入り口へ走り、戸を引こうとしたが、外から鍵がかかっているようで開く様子はなかった。
「何で！授業中以外は教室の鍵は掛けないはずなのに！」
　彼はそう叫び、開かないと理解した後も必死に戸を押した。もちろん彼の言う通り外から鍵がかかっているため開くことはなく、襲い来る恐怖と目の前の扉に体力を奪われた彼は教室の床に倒れ込んだ。
「何が起きているんだよ……」
彼はそう呟き、クラスメイト達に目を向けた。みなこの学校の制服を着ており、見たところ外傷はないように思えた。もしかしたら生きているのかも知れない。彼はクラスメイトに近づいていく。クラスメイトの一人の首筋に手を当て脈を見ようとした彼は、首にうっすらと線が入っているのに気がついたが、目の前の級友が生きている事を確認したい気持ちが勝り、線の上から手を当てた。脈はなかった。彼はここで初めて、悲しさを覚えた。
「くそ、あいつは……あいつだけは……！」
　彼は横たわるクラスメイトをかき分け、親友がそこに居ないことを確認するために一人一人顔を見て、その度に増幅する悲しみを堪え、それでも必死に探した。仲が良かった人間も、嫌いだった人間も、気になっていた子も、皆動かなくなっていた。だが、いくら探しても彼の親友だけはそこにいなかった。彼は親友がそこに居ないことを把握し息をついた時、教室が揺れるほどの轟音と共に雷が鳴った。教室が青白く照らされ、彼の顔が窓に映し出された。
「あ、うあ、ああああああっ！」
　彼はその場でうずくまり自分の顔を引っ掻いた。信じられるわけも、受け入れることができる訳もなく、それでも自分が体験している日常からおよそ切り離された異常が現実であることに彼は震えた。彼の顔は、親友の顔とうり二つ、いや、親友のものだった。震え続けた彼は、その場で気を失った。

「おい、起きろ、起きろよ……」
　頭の中で自分自身の声が聞こえ、学生寮の二人部屋、二段ベッドの下で彼は目を覚ました。いつも通りの朝だ。彼が見た映像は彼の脳裏にしっかりと焼き付いてはいたが、彼はどうやらそれを現実のものと考えなくてもいいと安堵した。
「おい、聞こえてるのか！？」
　今度は彼の耳元で彼自身の声が聞こえた。彼はいやな予感に身の毛がよだち、ゆっくりと、声の方を向く。そこに立っていたのは、彼だった。

　彼が後日知ったことがある。一つ目は彼のクラスメイトは、彼と親友を除いて全員亡くなっていること、二つ目は彼と親友はだけは頭だけ入れ替わり生存していること。三つ目は、ここが普通の学校では無かったこと。ではなんだったのか。それはまだ彼の親友も知らないらしく、なにも無かったかのように部屋に教師が現れ、二人を教室へ連れて行った。二人を先導している教師が胸ポケットから鍵を取り出し、鍵を開け教室内に入り、二人を招き入れる。親友の後ろにいた彼が教室の床に両足をついた瞬間、扉は勢いよく閉まり背後からガチャリと施錠音がした。

そのごみ箱の蓋は本当に必要なのか

そのごみ箱の蓋は本当に必要なのか

いつの頃からだろう、この国は変わってしまったとお爺さんは語り出した。中学生の僕にしてみれば自分が生まれてからこの方、自分の生きる世界は変わらないが、僕よりも数倍年をとっているお爺さんには分かるのだろう。お爺さんは何やら先程から自分の膝をしわくちゃの手の血管が張り裂けるんじゃないかと心配になるくらい強く握っていたが、僕にはその理由が分からなかった。
「お爺さんは、なんでそんなに体に力を入れているのですか？」
僕がそう問うと、お爺さんは逆に僕に聞いた。
「君はもし、自分の買ったテレビゲームがその日のうちに壊れてしまったらどうするんだい？」
「その時は、新しいものを買い直します」
僕がそう答えるとお爺さんは悲しそうに天を仰いだ。
「君が発売前から楽しみにしていたゲームだ。そのゲームを買って、期待しながら家に帰って、ゲームを起動した。それで動かなかったら嫌ではないかい？」
「それは嫌ですけど、ゲームが動かないのは良くある事ですし」
「それが、今と昔の違いなんだよ」
　僕はその後もお爺さんと長々と話をした。お爺さんが僕の話も聞きたいと言ったので、お爺さんの質問に答える形で会話は進んでいき、いつの間にか二時間ほど話し込んでいることに気づいた所でお爺さんが「もうお帰り」と言い、僕の課外授業は終わった。

　彼が私の元へ来た理由は課外授業の一環らしかった。街に住んでるお年寄りに、現代と昔の違いを聞き、レポートにまとめるという話だった。彼は私の家の隣に住んでおりお互い面識は会ったが、挨拶をするだけで立ち話するようなことは無かった。彼から話を聞きたいと言われた時は嬉しかった。近所つきあいが少なくなっているのも変化の一つだ。最近は家族以外と会話することも無かったので純粋に若い子と話できる事が楽しみだった。しかし、実際彼と話をしてみると、ありありと今と昔の考え方の違いを見せつけられた。今の時代の人間は感情の起伏が小さい。彼のゲームの話にしてもそうだ。私だったら、楽しみにしていたゲームが動かなかったら怒りが湧くだろう。発売前から雑誌やインターネットなどで情報を集める事に時間を割き、その度に期待が膨らんでいく。待ち遠しくなる。そして漸く手に入れることが出来たゲームが動かないかったら怒るのは当然だろう。作っているメーカーに文句を言ってやりたくなるだろう。だが、現代ではそんな事は出来なくなってしまっているように思う。
　以前、量販店で買った電気ポットが初期不良で動かないことがあった。メーカーに問い合わせをした際、不良品が多くなってきているんじゃないのかと指摘すると、あからさまに嫌悪感を出され、代わりの品物は直ぐさま発送しますとだけ言われ、電話を切られてしまった。よそでもそうだ。我々老人は社会から疎まれているのではないかと思うことばかりだ。少し「怒り」という感情を出しただけで、面倒な人間だと思われてしまう。そう思われることが辛く、いつしか近所の若者に自分から話しかけることもなくなってしまった。
　怒らなくなった若者たちは国を大きく変えてしまった。利用者からクレームが来なくなった事でメーカー側が手を抜き始め、商品のクオリティが下がった。それで消費者が満足してしまうため、更にクオリティが下がる。商品の説明書きには「大量生産品なので多少の不良等はお許しください」と書かれる始末だ。価格帯が安いものなら理解できるが、値段が張るものでも同じなのだ。私からすれば信じられないことだった。メーカーにしろ、サービス業にしろ、質が下がってきているのが明らかで非常に悲しく思う。私が彼くらいの学生だった頃は、よく教師から怒られたもので、その度に「なぜこんなに怒るのか！」と思った。初めて給料を貰って働いたときも、小さなミスをしただけで上司にコテンパンに叱られ、その時も「そんなに怒ることはないだろう！新人いびりか！」と思い、怒りなんて必要ない、自分は後輩ができても優しく接してやるぞ、と意気込んだものだ。そんな私が社会から怒りが消えていく事に怒りを覚える事になるとは思っていなかった。今の時代に「もっと怒れ！」と言っても聞いてくれる人は少ない。働いている人なら尚更だと思う。だからこそ、彼のような若者に伝えたい。もっと怒って、社会を良くしてくれと。

人形劇の閉幕

人形劇の閉幕

彼女は専門学校を卒業してから、服を作る仕事についた。現在は結婚して仕事を退いたが、もともとものづくりが趣味の彼女は引退した後も服を作り続けている。とは言ってもそれを商売にするつもりは毛頭なく、専ら愛娘の為のものである。生まれてから九年経った娘のために、彼女は今日も服を作る。娘が着用しているイメージを頭に描き、丁寧に裁断し縫い上げていく。ここ数年あまり身体が大きくなっていない娘の服をつくる事は彼女には容易で、作業は着々と進んでいく。彼女の表情は明るく、楽しそうであった。私にとって、それがとても辛い光景だった。娘は着せ替え人形でしかないのだから。彼女にとっては元気で活発な娘なのだろう。彼女が作る服からしてそれは容易に理解できた。しかし、それはまやかしなのだ。私は妻の行動が見ていられず、何度も止めようとした。辞めさせようとした。その都度、止めたら妻は壊れてしまう、そうしたら私は何を心の拠り所に分からなくなってしまうと思い、結局辞めさせることは今日まで出来ていない。だがそれも今日で終わりだ。後一時間、それだけ時間があれば妻は娘に服を着せることが出来るだろう。それで全てを終わりにしよう。仕事は昨日辞めてきた。一からスタートするために。

一時間後、彼女は私の見立て通り服を作り上げ、嬉々として子供部屋に向かっていった。私も妻の後を追う。現実を目に焼き付けるために。二度とこんな思いをしなくても済むように。今日こうして妻に服を作らせたのは、全ての清算。

妻は優しく娘の頭を撫で、ゆっくりと服を着せていく。白いワンピースだった。娘のイメージとは違うが、それでもよく似合っているように思った。じゃれ合っている妻と娘を見て、私はいつの間にか涙を流している事に気がついた。気がつくともう止められなかった。思わず声が漏れるほどに、私は身体の底から泣いていた。でも、私にはやらなければいけない事がある。幸せそうな二人に背を向け、部屋をでて携帯電話を取り出し予めメモリーに登録しておいた番号に電話をかけた。

その後、部屋に戻った私は仲の良い親子の絵を眺めていた。これが最後。妻はこれから、苦しみにあえぐことになるのだから。もちろん私も同じように。だからせめて、最後までこの光景をーー

階段を上がってくる足音がする。タイムリミットが来たようだ。私は懐に隠していた包丁で、妻の背中をついた。妻の声はもう私には届かなかった。涙を流しながら、無心で妻を傷つけていく。部屋のドアが開く音がしたが、それを気にもとめず、全てを忘れるために、また罪を背負っていくために。

その場についた警察官の目には凄まじい光景が広がっていた。しかし不思議なことに、その現場は凄惨でありながら美しく思えた。なぜそのように思ったかは警察官にも理解出来なかったが、目を奪われ、仕事をすることを数秒の間忘れていた。いや、数秒には留まらなかった。仕事をしようとしても尚、彼の身体は動かずにいた。目の前の男性は一心不乱に女を刺している。あふれる涙を拭うこともせず、声をあげながら、何度も何度も。彼には止めることは出来なかった。彼が過去に見た中で一番辛く悲しい光景に違いなかった。せめて、気が済むまで。警察官は、男が女を苦しみながらも刺し続け、白骨化した子供に白いワンピースが着させられているのを嗚咽を漏らしながら鑑賞していた。